

令和 元年 6 月 11 日現在

機関番号：22604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13001

研究課題名(和文)「オリンピック休戦賛同サインの壁」の可視化と教育的活用の方略

研究課題名(英文)The strategy for the visualization and the educational utilization of the "Olympic Truce Wall"

研究代表者

舩本 直文(Masumoto, Naofumi)

首都大学東京・オープンユニバーシティ・特任教授

研究者番号：70145663

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文):オリンピックの平和運動のため、「休戦の壁」の経緯について明らかにし、今後の活用への示唆を得ようとした。

(1)2012ロンドン大会の「休戦の壁」5本がIOCオリンピック博物館に展示され、平和思想の可視化と教育機能を果たしていた。(2)2004アテネ大会の「休戦の壁」を発見したが、活用されていない。(3)2010バンクーバー大会の「休戦の壁」は、ハイチ大地震の義援金のためオークションで売却されたが、元選手村で記念碑として可視化されている。(4)この3大会以外の「休戦の壁」は確認できなかった。(5)東京2020大会では、「オリンピック休戦」部署の認識不足があり、早急な対応策が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オリンピックの平和思想や平和運動に関する研究は、理想主義的であり目に見えないレガシーであるため、従来看過されがちであった研究分野である。しかしながら、今回の研究によって一部の「休戦の壁」の所在が明らかになったことにより、オリンピック教育においてその可視化と有効なアピールの方略について課題が明らかになった。このことは、今後のオリンピック運動の研究だけでなく、その推進や平和教育としても重要な成果である。特に、東京2020大会のみならず、レガシーとしての今後のオリンピック平和運動の展開に大きな課題が残されていることが明白となった。

研究成果の概要(英文):The purpose of this study is to clarify the establishing of the 'Truce Walls,' and to obtain the suggestions for the effective utilization of the 'Truce Walls' in future.

(1) Five 'Truce Walls' established at the London 2012 Games are currently displayed at the IOC Olympic Museum, where the idea of 'Olympic Truce' can be visualized, and playing the educational functions, (2) Though the 'Truce Wall' of the 2004 Athens Olympic Games were found, they have not been used at all, (3) The 'Truce Walls' of the Vancouver 2010 Winter Games were all sold at the auction to obtain donations for the Great Haiti Earthquake, but the 'Olympic Truce' are visualized by remaining as the memorial monument at the Olympic Village, (4) As the existence of other 'Truce Walls' except these three Games could not be confirmed, and (5) For the Tokyo 2020 Games, the lack of awareness among departments in charge of the 'Olympic Truce' was obvious, so the need for the urgent counterplans became clear.

研究分野：スポーツ哲学

キーワード：オリンピック 休戦センター
オリンピック研究 休戦の壁 休戦の壁画
オリンピック平和運動
オリンピック休戦賛同の壁
オリンピック

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

オリンピックの根本思想である「オリンピズム」が目指すものは「スポーツと文化によって心身ともに調和のとれた若者を育成し、ひいては平和な世界の構築に寄与すること」である (IOC、オリンピック憲章、2018)。この「オリンピズム」の考え方は、教育思想であり、平和思想であると言って良い。国際オリンピック・アカデミーや各国のオリンピック・アカデミーなどを中心にしたオリンピックの教育思想に関する研究には最近めざましいものがある。一方、オリンピックの平和思想や平和運動に関する研究は、内海 (2012)、Mestre (2013)、舛本ら (2014) の研究のように若干展開されてきてはいるが、まだ十分であるとは言えない。なかでも、国際オリンピック委員会 (IOC)、国際オリンピック休戦センター (IOTC)、国連の共同による「オリンピック休戦宣言」に着目した研究は、黒須 (2013) や舛本ら (2014) が行ってきたはいるが、オリンピック選手や役員が、選手村内に設置され、この「オリンピック休戦宣言」に賛同してサインする「オリンピック休戦賛同サインの壁」(以下、「休戦の壁」と略記) に関する研究は、Masumoto (2012) の研究を除き皆無であると言って良い。

舛本らは、これまでオリンピックの本大会とユースオリンピックの平和運動の接続性やオリンピック教育のあり方、あるいはオリンピック・レガシーについて研究を進めてきた。それらの研究によって、オリンピックの精神文化側面のレガシーの重要性および平和思想とそのオリンピック教育での推進の必要性を確認してきた (舛本・本間、2014)。その結果、オリンピック教育を推進する際に、このオリンピックの平和思想を可視化し、有効的にアピールする方略を構築する必要性が明らかにされた。そのために、従来は看過されてきたこの「休戦の壁」に着目し、その大会後の存在の確認とこれまでの活用方法に関心を抱くに至った。しかしながら、この「休戦の壁」に関する先行研究は、ほとんど無いのが実情であった。

2. 研究の目的

本研究は、オリンピック競技大会の主要目的である平和運動推進のための方法として、その可視化と印象的なアピールのために「休戦の壁」の設置目的とその歴史的経緯について明らかにし、今後のその「休戦の壁」の有効活用に向けた示唆を得ることを目的とする。

そのために、以下の4つの下位目的を設定することにした:(1) 2004年以降、これまでのオリンピック大会で設置されてきた「休戦の壁」の存在を確認すること、(2) それらの「休戦の壁」の平和運動としてのこれまでの設置目的と活用の実態を明らかにすること、(3) 2016年以降の夏季・冬季オリンピック・パラリンピック大会における「休戦の壁」の設置状況と活用の現状について確認すること、そして、(4) この「休戦の壁」を用いた2020年東京オリンピック・パラリンピック大会時の有効活用法に向けた示唆を得ること、である。

3. 研究の方法

平成28年から3年間で、2004年アテネ大会以降の夏季・冬季8大会の「休戦の壁」の存在と活用状況の現地調査を行う。各年度とも2,3大会ずつを調査対象とし、過去の大会の大会報告書などの事前調査、組織委員会関係者、オリンピック関連博物館、開催都市のオリンピック研究所などの現地調査により情報収集することにした。これらの現地調査から得られた情報分析から、「休戦の壁」の存在と教育的活用法などの平和レガシーを確認することにした。

特に、平成28年には2016年リオ大会の開催時のIOCおよびメディア報道などによる同時調査、平成29年2月は平昌冬季大会の現地調査を実施し、両大会の「平和の壁」に関する実態調査を行い、これらの同時代的に開催された両大会の調査結果を纏めることとした。

さらに、平成29年度および30年度には、2010年バンクーバー冬季大会の選手村跡地、2016年リレハンメルYOG冬季大会の会場および2018年ブエノスアイレスYOGの現地調査も行った。

また、平成28年度には、アテネのオリンピック休戦センターの現地調査を行い、2004年以降のオリンピック休戦活動と「休戦の壁」の嚆矢であるサインボードの存在の確認を行い、所長にインタビューすることにした。

4. 研究成果

平成28年度の研究の取り組みと成果は以下の通りである。

- (1) アテネにある「国際オリンピック休戦センター」の現地調査を実施し、2004年アテネ大会の際に初めて実施された「休戦の壁」サインボードの所在を確認することができた。しかしながら、当休戦センターの倉庫に保管されているのみで、全く活用されていない実態を確認した。当センターの所長へのインタビュー調査によっても、今後の活用計画がないことが確認されたため、この「休戦の壁」の今後の活用方法に関して意見交換を行った。
- (2) 2006年トリノ冬季大会時の選手村跡地およびトリノ大学のオリンピック研究センター (OMERO) への現地調査を行った。2006年冬季大会時の「休戦の壁」は選手村跡地には存在しないこと、大会時にトリノ市内のテレビ局 RAI 内に設置されていた「オリンピック休戦賛同署名ノート」もその所在が不明であり、両者とも全く活用されていないことが確認された。
- (3) 両都市のオリンピック休戦センターと OMERO とは、今後の研究に向けて情報共有体制を確立することができた。

平成 29 年度の研究の取り組みと成果は以下の通りである。

- (1) 2000 年バンクーバー冬季大会の選手村跡地の現地調査を実施し、選手村跡地の記念公園内に「休戦の壁」賛同署名者の名前が刻まれた記念モニュメントの存在を確認することができた。しかし、調査時の来園者はほとんどいなかったことから、関心も高くなく平和レガシーとして利用されていない状況であることが推察された。
- (2) 1928 年アムステルダム大会の際に利用されたオリンピック・スタジアムのマラソントレーの現地視察を行った。当スタジアム内に設置されていたオリンピック・ミュージアムが財政上に理由で閉鎖されており、世界初の聖火台を含めたオリンピックの平和モニュメントによるオリンピックの平和教育機能を果たしていないことが確認された。
- (3) 2018 年平昌冬季大会の現地調査により、韓国のオリンピック平和運動の現状を把握した。本冬季大会を機に、南北朝鮮の融和政策としての「平和オリンピック Peace Olympic」の横断幕が各地で確認されたが、「休戦の壁画」(2016 年リオ大会より名称変更)のレガシーとしての活用方法の情報は得ることはできなかった。
- (4) 2016 年リオ大会から「休戦の壁」が「休戦の壁画」へと名称変更され、2018 年平昌冬季大会でもこの方針が継承されたことが確認された。しかし、東京 2020 大会では「オリンピック休戦」関係の担当者にはこのような IOC や COG による「休戦の壁」に関する動向は理解されていないことも確認することができ、改善するようにアドバイスを行った。

平成 30 年度の研究の取り組みと成果は以下の通りである。

- (1) ノルウェーのリレハンメルに設置されている「ノルウェー・オリンピック・ミュージアム」を訪問し、2016 年リレハンメル冬季 YOG 大会および 2018 年平昌冬季大会における平和運動に関する展示関係の現地調査を行った。「休戦の壁画」に関する展示は見られなかったが、平昌大会の平和メッセージ関連の展示は行われていた。
- (2) 2018 年ブエノスアイレス YOG 大会前に開催された IOC の「Olympism in Action Forum」に参加し、学会における報告内容の調査を行った。本 Forum では、オリンピックの平和運動に関するセッションも催されたが、「休戦の壁画」に関する取り組みはみられなかった。
- (3) 2018 年ブエノスアイレス YOG 大会の現地調査を実施したが、YOG 大会の会場内には「休戦の壁画」に関する展示は見られなかった。しかしながら、YOG 大会時には恒例の国際オリンピック休戦センターによる「オリンピック休戦」の展示は行われていた。
- (4) 中国の NOC 関係者に依頼して 2008 年北京大会時に設置された「休戦の壁」のその後について情報提供を得た。既に 2008 年大会時の「休戦の壁」は存在してはいないが、来る 2022 年北京冬季大会の平和運動と連携してオリンピック公園に記念モニュメントが設置されていることを確認することができた。

以上の 3 カ年の「休戦の壁」に関する現地調査や報告書分析、インタビュー調査によって、研究成果として、以下の結論を得ることができた。

- (1) 2012 年ロンドン大会で設置された「休戦の壁」10 本の内の 5 本が、現在ローザンヌの IOC オリンピック・ミュージアム内に展示されており、「オリンピック休戦」の思想が可視化され、ミュージアムとしての教育能を果たしている。(2) 2004 年アテネ大会が嚆矢となった「休戦の壁」のサインボードを発見することができたが、全く活用されていない。(3) 2010 年バンクーバー冬季大会の「休戦の壁」の現物は、ハイチ大地震の義援金を得るためにオークションで全て売却されたが、「休戦の壁」賛同者名を記念モニュメントに刻んで遺していることにより、休戦活動の可視化が行われている。(4) 以上の 3 大会以外の大会における「休戦の壁」や「休戦の壁画」の存在は確認することができず、平和運動としての可視化も平和教育としての機能も果たしていない。(5) 東京 2020 大会に向けては、「オリンピック休戦」の担当部署での認識不足が明白なため、早急な対応の必要性が明らかになった。さらに、東京都下で実施されているオリンピック・パラリンピック教育においても「休戦の壁」や「休戦の壁画」に関する基礎的知識不足が明らかであり、早急に対応する必要性と今後の「聖火リレー」時などにおいて「オリンピック休戦」に関する啓発の必要性が示唆された。

< 引用文献 >

IOC、オリンピック憲章、2018.

黒須朱莉、IOC によるオリンピック休戦アピールの決議決定 1992 年第 99 回 IOC 総会議事録と国内外の新聞資料を手がかりに、スポーツ史研究、26 号、2013、17 - 31

Masumoto Naofumi, The Peace Movement on the Occasion of the 21ST Century Olympic Games: Developments and Limitations, Sport, Ethics and Philosophy, Journal of the British Philosophy of Sport Association, Volume 6, Issue 2, 2012, 123-137

舩本直文、本間恵子、無形のオリンピック・レガシーとしてのオリンピックの精神文化、体育・スポーツ哲学研究、36 巻、2014、97 - 107

Mestre, Alexandre Miguel, Pierre De Coubertin : A World Peace Project Through Olympism and the Olympic Games, 2013.

内海和雄、オリンピックと平和、不昧堂書店、2012 .

〔雑誌論文〕(計 10 件)

- 舩本直文、2016 年リレハンメル冬季 YOG 視察記、JOA Times、査読無、39 巻、2016、47 - 48
- 舩本直文、オリンピックの文化イベントの歴史と言語、日本語教育、査読有、165 巻、2016、30 - 43
- 舩本直文、バンクーバー・ウィスラーのオリンピック・レガシーの旅、JOA Review Online、査読無、19 巻、2017、<http://olympic-academy.jp/wordpress2/archives/category/16~20号/no19/no19-articles>
- 舩本直文、アムステルダム・オリンピックスタジアム旅行記、JOA Review Online、査読無、19 巻、2017、<http://olympic-academy.jp/wordpress2/archives/category/16~20号/no19/no19-articles>
- 舩本直文、2018 年平昌冬季オリンピック大会視察報告、JOA Review Online、査読無、20 巻、2018、<http://olympic-academy.jp/wordpress2/archives/category/16~20号/第20号/第20号記事>
- 舩本直文、小林勝法、後藤光将、師岡文男、2020 年東京大会のレガシー形成に寄与する大学連携の在り方に関する総合的研究：特に 2012 年ロンドン PODIUM に焦点を当てて、大学体育学、査読有、15 巻、2018、57 - 62
- 舩本直文、オリンピック・パラリンピックと人権 - 「多様性と調和」の実現を目指して、人権啓発学習資料：皆の幸せ求めて、査読無、2018、4 - 7
- 舩本直文、ノルウェーのオリンピック・ムーブメント：リレハンメル&オスロのオリンピック視察、JOA Review Online、査読無、22 巻、2018、<http://olympic-academy.jp/wordpress2/archives/category/vol22>
- 舩本直文、2018 年ブエノスアイレス YOG 視察報告、JOA Review Online、査読無、22 巻、2018、<http://olympic-academy.jp/wordpress2/archives/category/vol22>
- 舩本直文、2018 年 IOC Olympism in Action Forum 参加報告、JOA Review Online、査読無、22 巻、2018、<http://olympic-academy.jp/wordpress2/archives/category/vol22>

〔学会発表〕(計 5 件)

- Masumoto Naofumi、Olympic Education to promote Peaceful and Inclusive Societies、2016 International Olympic Academy 13th NOC & NOA Joint Session、2016
- Masumoto Naofumi、Olympism and Values、Pre-Symposium of the Olympism and Sport & Environment、2016
- Masumoto Naofumi、Olympism and Character in Sports、2016 Sports and Environment Symposium、2016
- 舩本直文、平和とインクルーシブな社会を推進するためのオリンピック教育、日本オリンピック・アカデミー2016 セミナー、2016
- 舩本直文、「オリンピック休戦賛同のサインの壁」の可視化と教育的活用、日本体育学会体育哲学専門領域夏期合宿研究会、2018

〔図書〕(計 5 件)

- 舩本直文 (監修)、ポプラ社、写真で見るオリンピック大百科第 6 巻：2014 年冬季ソチ～2016 年リオデジャネイロ、2017、47
- 舩本直文 (分担執筆)、玉川大学出版会、第 15 章オリンピック・パラリンピック、2017、200
- 舩本直文、講談社、決定版これがオリンピックだ：オリンピズムがわかる 100 の真実、2018、184
- 舩本直文 (分担執筆)、メディアパル、JOA オリンピック小事典 2020 (増補改訂版)、2019、351
- 舩本直文、大修館書店、オリンピックは平和の祭典、2019、(出版予定)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.comp.tmu.ac.jp/sport/personal/masumoto/masumoto.html>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。